

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年 08月 01日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科	理学研究科
職 名・学 年	博士2年
氏 名	宇野 良祐

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	20th International Congress of Myriapodology		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☐ 口 頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他(		
発 表 題 目	PREDATORS OF MYRIAPODA AND PREY ITEMS OF CHILOPODA IN JAPAN EXPLORED FROM LITERATURE AND INTERNET SURVEYS		
開 催 場 所	Serbia, Srebrno Jezero		
渡 航 期 間	2025年 7月 17日 ～ 2025年 7月 29日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	201,711
		宿泊費	96,542
		滞在費	34,754
		学会参加費	53,394
その他	0		
以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団の助成によって、円安と航空運賃の高騰により海外の学会発表がますます困難になる中、アジア人として唯一、第20回国際多足類学会への参加と発表を果たすことができました。ありがとうございました。今後もこのような形の助成を続けてほしいと思います。		

1. 国際会議について

Centre International de Myriapodologie (以下、CIM) が主催する International Congress of Myriapodology (以下、ICM) は、多足類を専門とする唯一の国際学会です。これまで本学会はおおよそ 2~4 年に一度の頻度で開催されてきましたが、本年はセルビア・Srebrno Jezero と呼ばれる自然豊かなリゾート地にて、記念すべき第 20 回大会が開催されました。会期は 2025 年 7 月 20 日から 26 日までの 6 日間で、会場はすべて貸切のホテル内に設けられました。会議では 4 件の基調講演のほか、42 件の口頭発表と 40 件のポスター発表が行われ、世界中からおおよそ 80 名の研究者が参加しました。規模としては比較的小さな学会ではありますが、南極を除くすべての大陸から研究者が集い、まさに国際色豊かな場となりました。一方で、アジアからの参加者は極めて少なく、発表者は私一人でした。また、ICM では女性研究者の活躍が目立ち、たとえばコロンビアやポーランドからは、若手女性のみで構成された研究チームが参加していたことも印象的でした。発表内容としては、ヤスデ綱の分類学に関するものが多数を占めていましたが、ゲジ目の繁殖生態や嗅覚利用に関する行動生態学的研究、さらにはイシムカデ目を用いた細胞毒性試験に関する発表など、多岐にわたるトピックが取り上げられました。こうした幅広いテーマに触れる機会は、国内の学会では得がたく、まさに国際会議ならではの刺激的な経験となりました。

2. 参加の成果

私は本学会において、「Predators of Myriapoda and prey items of Chilopoda in Japan explored from literature and internet surveys」と題し、日本産多足類の捕食者およびムカデ綱の餌生物に関する調査結果をポスター形式で発表いたしました。本研究では、扱う情報量が膨大であるため、ポスターに加えて捕食者および餌生物の一覧をアーカイブ化し、それを QR コード経由で参照できるよう工夫しました。ICM では、ポスターセッションが 2 日目・3 日目・5 日目に実施されました。会場は常に一つであったことから、セッション以外の休憩時間にも来訪者が絶えず、多くの研究者と意見交換を行うことができました。これまで多足類の捕食者に焦点を当てた研究はほとんど存在していなかったため、各参加者が対象とする分類群に対して、本研究のデータベースから該当する捕食者を紹介することができ、多くの方々から高い関心と称賛をいただきました。6 日目の夜には、バンド演奏を伴う懇親会が開催され、ダンスだけでなくセッションを通じて、言語や研究分野の垣根を越えた交流の場となりました。懇親会は深夜 1 時過ぎまで続きましたが、その終わりに、CIM の評議員である Paul Marek 氏および ICM の科学委員 Luiz Felipe Iniesta 氏より、私が進めているクレイモデル実験についての激励と具体的な提案をいただきました。これにより、今後の研究の進行および成果の公表に対する大きな自信を得ることができました。このように、極めて有意義な国際学会への参加を可能にくださった貴財団のご支援に、改めて心よりの感謝を申し上げます。